

## ■ピラカンサ・・・



「まっかな秋」の歌に代表されるように、この季節は赤系の色彩に彩られる植物が目立つようになります。

9号棟西側に、たわわに赤い実の目立つ木が茂っています。トキワサンザシです。そして、そのすぐ左には橙色の実をつけたタチバナモドキも。

この両者はともに、一般名をピラカンサ (Pyracantha) として広く知っているもので、ギリシャ語の「pyro (炎)」+「acantha (刺)」が語源です。火のような真っ赤な実をつけ、枝には多くのとげをつけていることから名づけられたのでしょう。

従って、赤色系の実をつけるトキワサンザシ(常盤山櫨子)と、橙系の実をつけるタチバナモドキ(橘擬)は、その和名ということになります。前者はヨーロッパ南部原産で学名「P. コッキネア (Pyracantha Coccinea)」、後者が中国原産で「P. アングスティフォリア (Pyracantha Angustifolia)」で、園芸店ではこっちの名前で売られることが増えてきました。

一般には、真っ赤な実のなるトキワサンザシの方がよく植えられているように思います。確かに、彩りの乏しい冬場の赤はひときわ目立つとともに、まさに息を呑むほどの美しさと言えるでしょう。このことが小鳥を呼び、実をついばませることで子孫を残そうとする植物の知恵となるのですが、ピラカンサの場合、ことはそんなに単純な仕組みでもなさそうです。

と言いますのは、この実には、わずかながら青酸系の毒が含まれているようで、そう言えばいくら強欲なヒヨドリやムクドリでも長くついばんでいるのを見たことがありません。ぱっと飛来してきてすぐに立ち去ります。

しかし、バラ科でサンザシの名前が付いているとなれば、誰もが口にできる実だと思うのが自然でしょう。ずいぶん以前ですが、毒のことなど知らずに一度だけ口にすることがあります。どうしてそんなことをしたのか記憶は定かではありませんが、不味くて吐き出したことだけは覚えています。その後も私は無事に生きていますから、強い毒性でないことは確かです。

つまり、自分なりの解釈ですが、もうどこにも食べるえさがなくなった頃、小鳥たちは不味いことも覚悟の上でピラカンサを食べにくるのです。しかも、ヒヨドリクラスともなれば、その毒性にも耐えられるのでしょうか。とはいえ、一気に食べ切るまで食べられず、結果として種子があちこちにまき散らされるというものです。

話は脱線しますが、身近に毒をもつ植物は結構たくさんあるもので、華岡青洲とチョウセンアサガオの例を出すまでもなく、キョウチクトウ、レンゲツツジ、スズラン、シキミ、ヒガンバナ、フクジュソウ、ポインセチア・・・、そうそうジャガイモの芽もそうですよね。アガサ・クリスティの作品を読むと、こうした身近な植物で殺人事件が頻繁に起きるからお互い気をつけましょう。

